

豊山学報・第六六号  
弘法大師御生誕千二百五十年  
記念特別号 抜刷  
令和五年三月発行  
真言宗豊山派総合研究院

# 如実知自心

大  
澤  
聖  
寛

# 如実知自心

大澤 聖 寛

## 一、問題の所在

田中千秋先生が、二〇〇七年十月二十一日に、「密門会出版部」より、『大日如来に抱いだかれて』と題して出版された本に、三ヶ所に亘つて「如実知自心」について説かれている。その文章を紹介することとする。

第一は、「私の心が無限であることを知る」に、

如実知自心と言つたり、即身成仏というようなことを言つたりしますとね。何かわしが背伸びをせんにや、どうも成仏せんだろう、如実知自心つて言つたら、わしがただもんじゃない、わしが値打ちがあるんだということを自分が努力して知るといふことだろう、というふうに思うて一所懸命になるといふようなことではなく、何か、やつぱり、下駄を向こうに預けてね、大きなものの中で、自分がいつのまにか、自分を忘れとるような時に―忘れたという時にはもう大きなもの、そのものしかないんです、そこには。ただ大きなものがあるだけ、ということになりますわね。大いなる如来がましまして、私はもう消えてしまつとるといふか、そういうところが―如実知自心といつたつて、それが如実知自心なんです。自心というのは、そういうその、

百六十四センチか、わしは……、そんなようなことの中に心があるというような、そんな小さいことを言うんじゃないくて、無限なんです。我は無限だということを知るといことが如実知自心です。<sup>(1)</sup>

第二は、「世界と私が融け合う」に、

たとえば「実の如く自心を知る」というようなことを言ったりします。如実知自心。真言宗で悟りつて言ったら、実の如く自心を知るんだ。同じことだと思っんです。この時、何か、私が如来と本當に一つになつてというようなその体験が、まあ如実知自心ということと同じことですからね。如実知自心つていつたら、別なことじゃなくつて、そうやって、その時、衝撃的な体験をへた時に、まあ、世界と私が一つになる、世界と私が一つにこう融け合つたというようなことに、やつぱりなるわけでございます。<sup>(2)</sup>

第三には、「座談会 田中千秋先生をかこんで」に、

その無限を生きる、ちゆうようなことがまあ、大日如来信仰ですわいな。大日如来というのは、そういう無限者なんだから。自分がそういう無限者に遇うて、それで私がそういう無限者に遇うて、それで私が消えて無限者に吸収されるところが、我即大日ですわな。私が、この私が――如実知自心にょじちしんいうけど、そのとき、自心つていうのは、これだけのこと、というよりも、無限大のものであることに気がつくということでしょうからな。無限大のものに吸収され、無限大のものに摂取されて……、いうところが、つまるところなんじやろうと思っますけど。そこで初めて、我、大日如来となる、ということ(3)です。

これらをまとめると、

第一は、我は無限だと知ることが如実知自心。

第二は、私が如来と本當に一つになつた体験が、如実知自心。

第三は、第一と同じである。

以上をまとめると、如実知自心は、私が如来と本当に一つになった体験、我は無限だということを知ったことである。

また、二〇一九年六月八日に、「密門会出版部」より、『菩提心を発せ——僧侶をめざすあなたへ』と題して出版された本に一ヶ所「実の如くに自心を知る」に、

如実に自心を知る、と言うたら、（中略）三世十方というか、もう時間的にも空間的にも、むしろこう無限なんだというふうなことに思いを致すべきことだ。むしろそうなんだ。<sup>(4)</sup>

と説かれていて、先の『大日如来に抱かれて』の結論を合わせると、  
如実知自心は、時間的にも空間的にも、我が如来と本当に一つになった体験であり、我は無限であること  
を知ったこと。

と解釈できるのである。

そこで、一、漢訳密教經典の「如実知自心」、二、『大日経疏』の「如実知自心」、三、弘法大師の「如実知自心」、  
四、興教大師の「如実知自心」、について検討することとした。

## 二、漢訳密教經典の「如実知自心」

如実知自心の漢訳密教經典の出典は、『大毘盧遮那成佛神變加持經』の、

祕密主、云何が菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり、祕密主、是の阿耨多羅三藐三菩提は乃至彼の法として少分も得べきこと有ることなし。何を以ての故に、虚空の相は是れ菩提なり。知解の者も無く、亦開曉も無し。何を以ての故に、菩提は無相なるが故に。祕密主、諸法は無相なり。謂く虚空の相なり。

爾の時に金剛手、復佛に白して言さく、世尊、誰か一切智を尋求する。誰か菩提の爲に正覺を成ずる者ぞ。誰か彼の一切智智を發起すると。佛の言はく、秘密主、自心に菩提及び一切智とを尋求すべし。何を以ての故に、本性清淨なるが故に、<sup>(5)</sup>

であり、また、『一切秘密最上名義大教王儀軌』の、  
自心實の如く覺り證し已る。彼の覺る所は心不可得なり。自心を實の如く正く了知す。<sup>(6)</sup>  
であると思われる。

### 三、『大日經疏』の「如実知自心」

猶し一切の語言を聞く時、即ち是れ阿の聲を聞くが如く、是の如く一切の法生を見る時、即ち是れ本不生際を見る。若し本不生際を見る者は、即ち是れ實の如く自心を知る。實の如く自心を知るは、即ち是れ一切智智なり。故に毘盧遮那は、唯だ此の一字を以て眞言と爲したまう。<sup>(7)</sup>

### 四、弘法大師の「如実知自心」

弘法大師の著作である『秘密曼荼羅十住心論』巻第一の「序文」に、

『大毘盧遮那經』に、秘密主、佛に問うてもうさく、「世尊、云何が如来應供正遍知、一切智智を得たまえる。彼の一切智智を得て、無量の衆生の爲めに廣演分布したまえる。乃至是の如の智慧は何を以てか因と爲、云何が根と爲、云何が究竟する」。大日尊答したまわく、「菩提心を因と爲、大悲を根と爲、方便を究竟と爲。

秘密主、云何なるか菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり」<sup>(8)</sup>。

と説かれてあり、また同じ『秘密曼荼羅十住心論』巻第十の「大意」に、

經に云く。云何菩提、謂く、實の如く自心を知る、此れ是の一句に無量の義を含せり。豎には十重之淺深を顯し、横には塵數之廣多を示す。又云心續生之相は諸佛の大秘密なり、我今悉く開示すと者、即ち是れ豎の説なり。謂く初め羴羊の闍心従、漸次に闍を背き明に向う。求上之次第なり。是の如の次第に略して十種有。上に已に説くが如し。

又云。復次に三藐三菩提の句を志求には、心の無量を知るを以の故に、身の無量を知る。身の無量を知るが故に、智の無量を知る。智の無量を知るが故に、即ち衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故に、即ち虚空の無量を知る。此れ即ち横の義なり。

衆生の自心其の數無量なり。衆生狂醉して覺せず知せず。大聖の彼の機根に随つて、其の數を開示したまう。唯蘊拔業の二乗は但し六識を知り、他縁・覺心の兩教は但し八心を示す。一道・極無は但し九識を知る。釋大衍には十識を説く、大日經王には無量の心識無量の身等を説く。是の如の身心之究竟を知るは、即ち是れ秘密莊嚴之住處を證するなり<sup>(9)</sup>。

と説かれている。

また、『即身成仏義』の「重重帝網なるを即身と名づく」の解説に、

是れ則ち譬喩を擧ぐ。以て諸尊の刹塵の三密の圓融無礙なることを明す。帝網と者因陀羅珠網也。謂く身と者我身と佛身と衆生の身と、是を身と名づく。又四種の身有り。いわく、自性受用變化等流是を名て身と曰う。又三種有。字印形是也。是の如き等の身は縱横重重なること鏡中の影像と燈ともしびの光の渉入するが如し。彼の身は即是れ此の身なり。此の身は即是れ彼の身。佛身即是れ衆生の身。衆生の身即是

れ佛身。不同にして而同なり。不異にして而異なり。故に三等無礙なり。真言に曰。歸命句は常の如。阿三迷底哩三迷三昧曳莎呵。初の句義は無等と云う。次は三等と云。後の句は三平等と云。佛法僧是れ三なり。身語意亦三なり。心佛及衆生三也。是の如の三法は平等平等にして一也。一にして而無量なり。無量にして而一なり。而も終に雜亂せず。故に重重帝網名即身と曰う。

は、『秘密曼荼羅十住心論』卷第十の「大意」に説かれている、

大日經王には無量の心識無量の身等を説く。是の如の身心之究竟を知るは、即ち是れ秘密莊嚴之住處を證するなり。

に通ずるのである。

次に『性靈集』の「如実知自心」については、『諸の有縁の衆を勸め奉て秘密の法蔵合て三十五卷を寫し奉る應し』に、

貧道愚陋なりと雖も、訓を先師に承けたり。貧道遠く大唐に遊んで深法を求め訪う。幸に故大廣智三蔵の付法の弟子青龍寺の法の諱な恵果阿闍梨に遇たてまつることを得て、此の秘密神通取上金剛乘教を受學す。

と示され、空海は大唐に行き、不空の付法の弟子である青龍寺の恵果阿闍梨に遇つて、秘密金剛乘、つまり真言密教を受學したことを述べた後、次のように語つておられる。

和尚告げて曰たまわく、若し自心を知るは即ち佛心を知るなり。佛心を知るは即ち衆生の心を知るなり。三心平等なりと知るを即ち大覺と名く。大覺を得んと欲わば當に諸佛自證之教を學すべし。自證の教と者いわゆる金剛頂十萬偈、及び大毗盧遮那十萬偈の經是れ也。此の經は則ち淨妙法身大毗盧遮那佛。自眷属の法佛と法界秘密心殿の中に住して常恒に演説したまう所の自受法樂之教なり。故に金剛頂經に説

かく、自受法樂の故に此の理趣を説く。應化佛の所説には同じからずと。又龍猛菩薩のたまわく、自證の三摩地の法は諸教の中に闕して書せずとなり。言うところは但此の秘密の經論の中にのみ説けり。自外の顯經論の中には説かずとなり。<sup>(13)</sup>

と説かれていて、「もし自心を知るはずなわち仏心を知るなり。仏心を知るはずなわち衆生の心を知るなり。三心平等なりと知るはずなわち大覺と名づく」の「もし自心を知る」は「如實知自心」に当るのである。

## 五、興教大師の「如實知自心」

『打聞集』に、

如實知自心とは、獨り眞言に名づくべし。心の實相を本有のごとく知るゆえに。心はもと、無量無邊なるを、小乗は六識と知り、菩薩は八識と知り、權佛乘は九識と知り、『釋論』は十識と知り、眞言は無量識と知る。無量を知らざるゆえに、貪と名づけ賤と名づく。本來無量なるを、無量と知るがゆえに、如實知自心と名づけ、眞言行人を、みな觀自在菩薩と名づく。<sup>(14)</sup>と説かれてある。

また『打聞集』の「觀自在菩薩」について、『阿彌陀祕釋』には、「大意の序」に、

迷悟われにあれば、三業の外に佛身なし。眞妄一如なれば、五道の内に極樂を得。この理趣を覺れば、すなわち時の心これを觀自在菩薩と名づく。有爲無爲の諸法において、すなわち一心平等の理を覺つて障礙なきがゆえに。この心究竟すれば、分別取著を離れて、性徳の一心を證するがゆえに、名づけて阿彌陀如来となす。これ大意なり。<sup>(15)</sup>



と説き、ここでは「觀自在菩薩」は「阿彌陀如來」と示されている。またこの後に「名號解釋」に、

つぎに名號を釋せば、天竺には阿彌陀と稱し、唐には翻じて無量壽・無量光等という。およそ十三の翻名あり、これすなわち顯教所用の義なり。ただし密宗の意は、一切の名言、如來の密號にあらざることなし。しかりといえども十三の翻名について、實義を釋せば、一には無量壽。法身如來、法界宮に居して、不生不滅なり。このゆえに大日如來を、あるいは無量壽佛と名づく。<sup>(16)</sup>

このことを「諸尊の名號は大日如來の異名」に次のように説いている。

このゆえに十方三世の諸佛菩薩の名號は、ことごとく一大法身の異名なり。また十方三世の諸佛菩薩は、みな大日如來の差別智印なり。ないし一切衆生の所出の言語、密號名字にあらざることなし。これに迷うを衆生と名づけ、これを悟るを佛智と名づく。このゆえに阿彌陀の三字を唱えれば、無始の重罪を滅し、阿彌陀の一佛を念ずれば、無終の福智を成ずること、帝網の明珠に、頓に無盡の珠像を現するがごとく、彌陀の一佛、速すみかに無邊の性徳を滿みずるなり。<sup>(17)</sup>

と説かれていて、「十方三世の諸仏菩薩は、大日如來の差別智印つまり、大日如來の内証の一分を司る諸尊である」ということである。

## 六、まとめ

一、田中千秋先生の「如実知自心」は、「時間的・空間的に私が如來と一つになった体験で、自分が無限であることを知ったことである」。

二、『大日經』の「如実知自心」は、「云何が菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり」と説き、「自心に菩提、

一切智を尋求するのは本性清浄であるからだと言っている」。

三、『大日経疏』の「如実知自心」は、「若し本不生際を見る者は、即ち是れ實の如く自心を知る。實の如く自心を知るは、即ち是れ一切智智なり」。

四、弘法大師の「如実知自心」は、『秘密曼荼羅十住心論』巻第一の「序文」には「秘密主、云何が菩提とならば、いわく実の如く自心を知るなり」と示され、『同』巻第十の「大意」には、『大日経』王には無量の心識、無量の身等を説く。かくのごとくの身心の究竟と知るは、すなわちこれ秘密莊嚴の住処を証するなり」と説かれてある。また『即身成仏義』の「重重帝網なるを即身と名づく」の解説の「仏法僧これ三なり。身語意また三なり。心仏および衆生三なり。かくのごとくの三法は平等平等にして一なり。一にして無量なり。無量にして一なり。しかもついに雑乱せず」は『十住心論』の巻第十の「大意」に通ずるのである。

五、興教大師の「如実知自心」

『打聞集』には、「本来無量なるを無量と知るがゆえに、如実知自心と名づけ、眞言行人を、みな觀自在菩薩と名づく」と説かれている。さらに『阿彌陀秘釋』の「大意の序」には、この「觀自在菩薩」について、「三業の外に佛身なし。眞妄一如なれば、五道の内に極樂を得。この理趣ことわりを覺れば、すなわち時の心これを觀自在菩薩と名づく」と説き、また「有為無為の諸法において、一心平等の理を覺つて障礙なきがゆえに。性徳の一心を證するがゆえに、阿彌陀如来」としている。また、「名號解釈」に「一には無量壽。法身如来。法界宮に居して、不生不滅なり。このゆえに大日如来を、あるいは無量壽佛と名づく」とし、「諸尊の名號は大日如来の異名」に「十方三世の諸佛菩薩の名號は、ことごとく一大法身の異名なり。また十方三世の諸佛菩薩は、みな大日如来の差別智印なり」と説かれ、「阿彌陀の三字を唱えれば、無始の重罪を滅し、彌陀の一佛、速かに無邊の性徳を満ずる」と説かれている。興教大師は、「如実知自心」は「彌陀の一佛

に無邊の性徳を満ず」とされている。

註

- (1) 田中千秋著「大日如来に抱かれて」田中千秋先生講話集、密門会出版部、頁一〇九、二〇〇七年十月二十一日発行
- (2) 同頁一五七
- (3) 同頁三三二
- (4) 田中千秋著「菩提心を発せ」密門会出版部、頁三七八、二〇一九年六月八日発行
- (5) 大正蔵一八・頁一・下
- (6) 大正蔵一八・頁五三七・上
- (7) 大正蔵三九・頁六五一・下
- (8) 定本弘法大師全集第二卷・頁七一―八
- (9) 定本弘法大師全集第二卷・頁三〇七―三〇八
- (10) 定本弘法大師全集第三卷・頁二八―二九
- (11) 定本弘法大師全集第二卷・頁三〇八
- (12) 定本弘法大師全集第八卷・頁一七四―一七五
- (13) 定本弘法大師全集第八卷・頁一七五
- (14) 興教大師著作全集第二卷教相部二、頁一八八
- (15) 興教大師著作全集第五卷内觀部、頁二二六
- (16) 興教大師著作全集第五卷内觀部、頁二二六
- (17) 興教大師著作全集第五卷内觀部、頁二二八